

Title	修論報告：中国社会における二つの輿論の乖離と統合： ロンドン五輪をめぐる中国メディアの言説を事例として
Sub Title	
Author	宋, 愛(So, Ai)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.206- 208
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2014年度大会報告要旨
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0206

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修論報告

中国社会における二つの輿論の乖離と統合

—ロンドン五輪をめぐる中国メディアの言説を事例として—

宋 愛

近年中国社会において、中国国営メディアの言説とネット上における言説との乖離する現象が、中国人研究者たちによってたびたび指摘されるようになった。ここでいう〈二つの輿論の場〉とは、中国の国営メディアの言説とインターネット上の言説の間に、齟齬が生じ、お互い関心を持つことなく、合意や共振が生じえない異なる輿論の空間を指す。2011 年 7 月 29 日には「政府の公式見解と民間の輿論の場における対峙と食い違いがますます増大している」という記事が人民網（人民日報ネット版）に掲載された。また、先行研究において、「二種類の相反する声と観点は形成され、互いに独立し、干渉し合わず、まさに水と油のよう」（陳 2012）という主張もしばしば見られる。

このような状況を踏まえ、本研究においては、「ネットの輿論の場」を中国版のツイッターである weibo に絞り、「weibo の輿論の場」を「国営メディア」と対抗する二つ目の輿論の場として検証を進める。ロンドン五輪の出来事をめぐる言説を分析することによって、〈二つの輿論の場〉における言説の乖離にいくつかの形式があること、そして乖離ばかりではなく、時によって〈二つの輿論の場〉における言説が統合する場合もあることが明らかになった。そして、統合が見られる上に、オルタナティブ・メディアだと思われてきた weibo が、必ずしも常に対抗的立場をとるものではないことが示された。

ロンドン五輪に関して、特徴的な言説が現れた「開会式の頃」・「バドミントン失格判定」と、「水泳選手ドーピング疑惑」という三つを事例として取り上げ、検証し、分析を試みた。

開会式の直後に、人民日報の子会社である環球時報は、「ロンドン五輪開会式花火、すべて中国が製造」という題目で記事を掲載し、中国の存在感を誇示した。しかし、同じ時期に、weibo 上においては、ロンドン五輪開会式を激賞しながら、北京五輪の無駄な豪華さに対して批判する言説がよく見られた。その他、「ロイター通信社の記者であるデヴィッド・グレイ (David Gray) が撮った北京五輪施設の現状」という一連の写真は、「五輪廃墟」との言葉が加えられ、weibo において多くリツイートされた。

一方において、異なる形式の乖離もまた見られた。2012 年 8 月 1 日、準々決勝での組み合わせを有利にしようと、1 次リーグ最終戦で安易な失点を繰り返すなど、わざと負けるようなプレーをしたために、バドミントン女子ダブルスが失格処分とされた。これに対して、国営メディアはめずらしく批判的態度をとり、weibo 上においては逆に、中国選手を擁護する言説が溢れるようになった。新華社は「名利を追い求めるためにスポーツ精神に背くべきではない」と

「中国スポーツ選手、前進する祖国の歩みについてきなさい」という二つの署名社評を新華網に発表し、「処罰や批判を謙虚な気持ちで受け入れるべきである」と主張した。それに対して、weibo 上ではこの出来事をめぐって、該当選手に同情し、応援する言説が主流となっていた。

さらに、葉詩文という若手女子水泳選手に関するドーピング疑惑事件について、weibo 上と国営メディアの言説は非常に類似していた。葉選手はイギリスの *Nature* 誌にドーピング疑惑と報道された。*Nature* 誌は「なぜオリンピックにおける卓越した業績は疑惑を招くか？」をテーマとした記事を発表し、たとえ検査に通ったとしても、ドーピングを使った可能性を排除できないと主張した。当時アメリカに留学していた江来は六つの論拠をあげて、*Nature* の記事に統計上の不正がみられることを指摘した。8 月 8 日に、*Nature* は江のコメントを丸ごと掲載し、「我々の読者と葉詩文選手にお詫びする」という文書をもとの記事の下に加えた。この出来事に関して、中国中央テレビ (CCTV) のニュース・チャンネルが繰り返して「*Nature* 誌が謝罪した」ことを報道し、また人民日報が 8 月 8 日に「イギリス *Nature* 誌は葉詩文と読者に謝罪した」という記事を載せた。新華網も「中国国内の学者を含め、多くの中国系学者は、*Nature* 誌の記事に存在していた誤謬を指摘した。その中で、江来の書き込みが一番有力であった」と、江のコメントを評価した。その際に、国営メディアの言説と統合した weibo 上の輿論が出現し、国営メディアが報道した「*Nature* 誌が謝罪した」というニュースのウェブリンクが、weibo 上に「我々が中国博士、勇ましいぞ (壮哉、我中国 PhD)」というコメントが付けられ、数千回以上リツイートされた。すなわち、この際の〈二つの輿論の場〉において、言説が類似し、また相互に引用し合い、連結し合う統合性も見られた。

weibo 上の言説が通常に国営メディアの言説と乖離する要因の一つは、weibo 上に強い影響力を持つ「公共知識人」中国を西洋の先進国と比較する際に自国を冷評し軽蔑する言説を発信する傾向があるからである。一方で、「外部の目を意識」する中国の「国民意識」(斉藤 2006) が、バトミントンの事例における二つの言説が乖離する特殊パターンの重要な要因と考えられる。「外部の目を意識」した新華社は、バトミントン選手の「無気力の試合」を「中国イメージに悪い影響を与えた」行為だと定義づけたがゆえに、珍しくきわめて辛辣に自国の事情を批判した。一方において、中国事情をめぐる言説を分析すると、国営メディアと weibo の二項対立図式がよく見られるが、*Nature* 誌のドーピング疑惑報道などの国益に関する国際的な問題が起こる際に、国営メディアと weibo における言説の統合も見られる。

また、〈二つの輿論の場〉の乖離のみに注目すれば、weibo が中国社会における一種のオルタナティブ・メディアだと定義づけられることも一定の妥当性を持つが、〈二つの輿論の場〉における言説の統合性に目を向ければ、weibo が必ずしも常にオルタナティブ・メディアとして反対する立場をとるメディアでもないことは明らかなのである。

【文献】

陳広娟.2012.「打通『兩個輿論場』構建新聞傳播新格局」『新聞世界』2012 年 7 月 : 21-22.

斎藤泰治.2006.「1990 年代後半から現在までの中国におけるナショナリズムをめぐって (2)」
『教養諸学研究』2006 (121) : 61-77.

Weiss, Meredith L..2014.“*New media, new activism: trends and trajectories in Malaysia, Singapore and Indonesia,*” *International Development Planning Review*, 36 (1) : 91-109.

(そう あい 慶應義塾大学大学院社会学研究科)